蓬生

拾五

15

関屋

拾六

16

△蓬生卅一　十五冊目

身ヲハカナシ横ノ并也花云以詞并歌為巻名詞云正ワケサセ給ニシキヨモキフノツユケサニナン侶ルトアリ哥ニハシゲキヨモギノトアリ是ハヨコノ并也源氏廿七八ノ事見タリ作者蓬生ノ君ノ始終ヲ書アラハスニヨリテ初ハ源氏ノ須磨ヘウツリ給テ帰京ノ事ヲ終ハ又二年計古宮ニナガメ給ヒテ二条院ノ東ノ院ニウツリ給事ヲノセタリ是ハ物語ノ家ニ文添メル事ヽ本意ハニサシツヨモギノ宿ヲ尋タニテ露分給ヒシ事源氏廿八四月ノ事ヽ是ヲ以横ノ并ニハトレルヽト云ヽヽ

△細流云巻ノ名ヨモギフトツヾキタル詞ハナキヽヨモギト云事詞ニモ哥ニモ見タリ花鳥ニハ正ワケサセ給ニシキヨモキフノ露路ケサニナントアリ普通ノ本ニハ只ヽヨモキノ露路ケサトアルヽ横ノ并ヽ澪標ノ先ノ事ヽ源氏廿七ノ事ハ講ナトノ事ヨリ廿八ノ四月此宮ヲトヒ給事アリ又末ハ繪合ノ末迄ノ事アリ竪ノ並ニ成ヽ悉皆常陸宮ノ始終ヲ書ルヽト云ヽヽ

△已抄ニモ同之タトヘハ夢ノ浮橋ノ巻モ夢ト計ハ云ガタサニウキハシト云カ如ニ源氏廿五六七八須磨ノ左迁ノ事ヨリ見タリ物語一ノ文体ヽトイヘリ面白ノヽト云　云

△河海云蒿莱生古宮ト云杜詩蓬生非無根漂蕩隨高風天寒落萬里不復帰本叢客子念故宅三年門巷寒、△拾遺イカデカノ尋キヌラムヨモキフノ人モカヨハヌ我宿ノミチ

モシホタレツヽ　源廿五須磨ヘ左迁ノ時ノ事也
行平ノ哥　ワクラハニ問人アラバスマノ浦ニモシホタレツヽワブトコタヘヨ

カリノ御ヨソヒ　スミヘ
無紋ノ衣ヲヽ召タル
事ヘカリソメノ心也
竹ノ子ノヨノウキフシ
花云ウス雲ノ女院ハ
春宮ヲ持給フニナゾ
渓ヽ女ノウキフシト云リ此説
サミ玉ヘルト云リシタメ計ニ竹ト云
後撰ニ　今サラニナニ生ケン竹ノ子ノウキフシシゲキ世トハシラズヤ
中〳〵ソノ數トモ
是迄ハ双地ホワム
ノ事ヲ云ンタメノ序文也

△もしほたれつゝわひ給ひし比ほひ都にもさま〳〵
おほしなけく人おほかりしをさても我御身の
よりところあるはひとかたのおもひこそくるしけ
なりしか二条のうへなとものとやかにてたひの御すみか（紫上）
をもおほつかなからすきこえかよひ給ひつゝ位を
さりたまへるかりの御よそひをも竹の子のよの
うきふしを時〳〵につけてあつかひきこえ給ふに
なくさめ給ひけむなか〳〵その數と人にも
しられすたち別給ひし程の御ありさまをもよそ乃
思ひやり給ふ人〳〵のしたの心くたき給ふたくひおほかり
ひたちの宮の君は父みこうせ給ひにし名残に

讀杜艸堂
[seal]

大空　海ニハ七夕ノ一
シヒケリサナノ氏

又思ひはべりし人もなをはかなくいとしうらみ給
ほう君なりしと思ひかけぬ御身のゆくへきそ
とかくひやうふしとさんざ思しさ心のめしきは
い義をひたり主と心もあしたらかなをとの
御なさけだつわとおかしうわしくぜうすらう君
所侍たもとのきばきなは大空のほしのひかりを
うけてなみうほしなるへちしもすくゝ給し
誰にあ主はみ世もはなきいてきなへてのくうゝく
あかしれぐれしまの義まにわざとふりゝぬうるの
んぶしいうちわすれたるやうすてとなくおり
まみしはふわりんてしもえたほ孫きてえ給いまゝ

かはゝ名殘にたりしはかなくゝゝとゝし給しをとゝ
月ゆるきゝよはゆ達よさびし英はほのほなるなゝ
ゆるき世りしかとはいでやいとくちおしき御
すくせなわくわおがえ世源仏のあくいま性へらん
やうなわしは心らんよういはれがも人にいはぐ
おはれるりのなわがわとおわがゝさうやえまかしと
わかうさ此よの事といひながらまうさふれむすさ
なよはあわさまあうゝあしけきとつぶ庭義な君く
あゆうよはやこつぶたわしあなさ乃としご給ひ
いふうひなきさびしうふめなきてすくゝ給しを
中ゝほしよばきそなうひかなはこ年月よいと

白氏凶宅詩ニ
梟鳴松桂枝
狐蔵蘭菊叢
文ニえけホミテヨルニヤ

コダマ 樹神 粉神
木魅 木霊 物精

さんごろく思ひなげく處しずりしもさではわぬ
へ来人〳〵いなの侍りし家はきそあれはし哉か
つゆくふまつりさびていきちかぬ女たちれいの
さくぬもあわて月日ありまつりひてかくしもの人へ
うたすくなくなわゆくりとまわはまさはし宮乃
うちいと浅つきのきみ家ふなわてうときよしう
くどきむこたちりふくろうのこ鳴を松夕ふみえて
なかしは人くまうさやうみれりのもせられて
うげかくしけきこぐまなどくりつぬ物花所を
えそやうくかふちをありし物まひしきこと
乃こうぼまつぬよまれくのこ宮そさやつふ人は

終夕ヨリ五更ニ至ル
一原ノ上ヒ号ト時ハ未ヘ節目アルモノハ二字ナガラ二字メルトシ
一原ノ左述後

野いとわわかし浅ち原すゝき處〳〵なとのかたも志ほき
家はくわらみれむがしられ宮乃こうちどうら原ふ住居て
いれちたまはきてんやと經りはまでいむあらし
ゆかさは床残さ庭ありきませ給ていをうつりの
おほしめしぬはほまぬよかほいしう住給いなん
うちとまわきふ人をいとえんゆしなとや文ゆ
またとはないかへしやひと乃きておもむきうもあわ
いく風すふしつなかわなまほそはいりつきんかく
おぼしげよあまそぬまどかやの侍りけとまわ
たるんちするゝうきすみかの思よなくさゝてまう
はまどうちなきは〳〵ありもうけばたれてうどもも

ウチモネナニシテニ ソウニタヘトムー

礼記曰宗廟器一不鬻市

いにしへこだいよなまじたるが着座りまそうなりしきを
あまり物のゆくへをきゝむと思ふ人は人をなりのきうしたる
わざとそれ人々の人をさ様妙ふなとさはきて
おん内すなも坐のぼりがらなまぼしきあらきぬ
思ひはかなはれてふひをなをまたれ女ゆりがゆくは
きんうこうはよれつまの事とてとわぬぎうりし
つめ入りちゃのおかふあれ乃えぐなしさ説はく諸
りんとける時も候るをいかりてうけさめ捨てめんすと
思ひは妙ひてあう志をうきを捨けめなどてうゝ語く
しきや人れ歌れおさわとはさらむなゝよ人れ法かい
さがりむり若ある事ゆゑれたまひてさなわざを

同キ法師 円ミ 木法師
両説ノ何云木法師
ト云ハ気スグ成ルノ心
橋姫ノ巻ニコハく老 ウトクノ僧都僧正キコハクキスゾニテトアルモ同心
花鳥ニ俗ニキ男ト云ガ○如シアラく老ヲ云トアリ両説六ケ敷キトウシ切
テ法師上可見
ヨモギヲラヅニ ヨモ
ギフト云 呉本不用
世ヲ思ハナレシメル僧
ト云一ゝ

せうを捨りもどえうのなきさまをまてとゝもかみえて來にあふ
人ハあさ法師也ふと佛せうとのぜんしれさと
ますわうまれ小も京入出捨ふ時ハさうしのかざ義
未ワムノ死ニ ダイゴノアザリノ一
妙へどうまもよみなきふなめなど人すそれなしき
佛しとゆふ中小もたはぶなくさの世をえなま
たるひゝゑ入りもれしゝ捨てえげなくさゝよも來を
ぶよう義りゝツん物妙思よわ捨りとど來なまりよ
あさちハ座のれもしみえとしくかよも來ハ行を
あらうひておひれかわむぐういかしあんうしの
みうとをとちこゝめさるぶふれわしけまじかゝくぼれ
一前ヲシテ在ル入門
ぎ很なるめぐわの垣をるうしなどの乃ぬくなるし

総角 童ノミツラユイタル幼稚ノ名ノイニシヘモアレド今ニテハ牛カヒ童ノコト

うなゐちこにて春夜になればうしかふちこのはかまきたれ
んさんへきめざましきは月雁のはかりて年
らうたもたつきにしきもれやのよきはかなしくぞ
あはれなどいふ猿の子もほうふのことわざにちとまは
けせぶすさまじき事にわたりてあはれにいとしき事
おもうわぬきひとなどいふ心ささぐる人はこれを
おもひ庭わのさびしけはきばまやの宮をいふやうの
物ありけにしかばてふわこさわけきまぶかくいとしき
野らやぶなまとどもさしすにてんてんの肉たのわい
あわしの土ほらひすからほ庭うふかい義
などける人もおもしろわいはまれかなまさる事

野ぶ薮 里ハアレテ人ハフリニシ宿ナレヤ庭モ籬モ秋ノ野ラナル 万葉ニ草ノ字ヲノラトヨメリ
東坡詩ニ 貧家浄掃地 貧女常梳髪

なきうたりしき涙にぬれてなやましくくるし路
ちるなまなかるる物のうかなどやうのすさめこと
ありてしうはまつく地も思ふぐさむふりさふめれ
さ庭うの事に帰心をうくもみし路わさとか
うのましくき様ぞをのはるうみいうく事あふ
雅ハおかしんなは文あふよりなどもちちしてさう
わの歌人ハ本学りつきても心をなくさめたまへ
はまどおやのもてうしつおよ路し帰心をまて乃
まくよ世をつくましふ物よおかしてまれかも
しとかよひ路べ奏涙わふわをさそう小なま路りは
わかよたるてほしあけてうつもわたこやのとし

唐守 藐姑射乃自 何モ古キ物語ナリ 焚人并姫ハ竹取ノ物語ナリ

紙谷紙ハカミヤ川トテ北野ニ平地ニ中ヲ南ヘ流ルル川ナリ仁和寺ニ居ラス時ニスキ初タル紙也万ニ三ニチソノ注ミノカミトヨメリダンシ也

花園左大臣有仁公其比近衛扇ヲ持テ念誦ノ数ヲ取給ヒしト也

かくやひめ乃物語の忠りう義たるなかとおほく
まさぐわしれふし給ふ係うたとてもおほしき（難 テズサミノ心し）
屈うよろわいで毘ゑをも僕人我もありしんえるは
あちうえんどう給もあわけまさう係けし義よむやかえ
みちハ色まみなどの御ふくだめふよふ係す世の
めなきたるなとはいともさましけなるとせめて
ふりめ給にわわくハ承義日給けたまふゆまのよの
人のもとめ係獲うちまうえんをことひるどいふすいと
えうりしく志給て覚ある人もかけまどはくなどまれ
すき給りはよやうよう係りしくすりのし給参る
情従給といひしめのとごのえまうとし給

玄元ハ巴抄ニハヲバノ示ノ人ゝトス但玄ハ其ゝ娘氏ノ一ニシテカスユルし

ほくがれまそぬあれまてきふこひつましがかよひ
家わし新院うき給などしもいとくえがさくら給（何し氏不知海ニハ…）
ぼうきまゝ之れ姫君の母小の方礼たまのうすふれら
ぶまてご殿の御乃すふ成妙へ係あわなむむきあせ
うばきそよ給しきわの人世ももむ髪よもうぬ示
よわいおや世をまうてかよのしをと思てとおほく
い義りよふ姫君いかく人うときたくせあれば椿
まじくもいひかよひかいば住のまなばたれとしめ
給ておもてふきかおぢしたわしうばひめ君乃清
有さ係のんくろしくなるもゑんとかつひゆさば安ど
あまゝふくげな係ことも義ともいひきよをつし附く

モトヨリアリツキタルサワウノナミ〜ノ人ハ　是ヨリ又地ホンヲバイヲ云ンタメニ
先世上ノ人品ヲ云出シ種姓ノイヤシキ人ニモ必思アガル人モ有　ヤンコトナキトハ
ホンヲバ付近ク脇
ニ可成宿世ニヤズ頓
ノ少方ニ成名ヲ汝ラト思ハ、ハナハダ〜シキトシゲス〜シキトニ一〜

やうれくわかしとれわかさはぼよするさうやうのなんくれ
人乃中にも義ひとつまりきつゆをはくろひ
思あがるもおほかた座むことなまよすぢながらも
おうまでおはべるすくをあわけまいなやんごとし
なをくしき御なんなりずはわかくわきまへなく
をとわのさうまにてはなはだいしくおもいまたなわ
りしをいでかくぬよ乃ほ思ひりこそ是をまう
むさえどものはのひ人ありなしてきこおのれなぎを
などれかるひたるうさきうあまいとうし能座にき
うし能になるらんと思てこよなくこころありわくらき
能てはことのねもうき能かしまほしずなく人なん

イドムハ　アラソウ心
コナタキハ　コトく越ス
ホツムノ本姓ヲ云

侍ると達こそくわいたれ侍侍もつまりいひわりよか
きとど人ありいはむむんにはなりてでおちちみえは能
はしみなまいさもむほひ能をぬを孫ずいかうなん
思日く座りしゆやゆりみ歟あるし大なくなわぬ
むさあどもはるべき事はゆまりえをまでくさなん
とさこの君ばみ座もわざなりんの心ふかくてなる
すふかく座りわなんとすふ小心かうき御前有様乃
つまりもとふらひやてまどちのきたのみ侍ほうる
能にまわれいとわされありうらめさくなんなど
（言能　好言）いさよずるをちうりけひさ能りまばほなゆく
うとくしや心ひをはまおかしあぶるともさな

伊賀物語 トカモナキ
人ジウテヒクミ一首ナ
ジノカエニノアフトニ云
ウナヒノハ 呪咀シ

やむごとなきへ参る人、我大将殿もやむごと
なくしも思まいらせ給りしなどむしうけひろわ
さる程は思ふまゝに世の中にゆるされて都にかへら
なからはめの子されはなひかてうちさりしく我も
いつでも人よき様にふうふまよひ給しとは謂ん
ものきんとのみ思きたふれとこ女房はきてすゝ
きなもくこま候なも人乃んそへをえなふよ兵り
れほしきる事さ候くなりかやうにおはさて
しまいほどにさうる思ひでなくきみえて月日
へぬいまはかくざりなかりわかゝしまはしぬさ候
ある法さ候をかなしういなしおな事を思なりくも

末ニハ大宮ノ…大将殿ト申…

岩ソヽグタルミノ上ノ
サワラビモモヘ出ル春ニ
アヒニケルカナ

廿八首ヨリヤハ
ウカリケン我カニツノ
タメニナルカ

寿只ハ末ノ浪ハアシキ
ニシニサナル…

きえいはる事にかひひなはなんやうもんどわかすわ
ほとどたひしがりろふなどまでよ様ひ思ふなる法
くらぬおもふたまはまなどすふをよろよの御きくへよ
なからわたなしうわしおかのうれりしさはたく
我身ひとはれたゝめ心なまゐるとおぼへしうひなをよ
世の中をんくさくてつくくうかしきれば人はまるぞ
候我乃こなれおふ大殿乃御あは程まそよまきうり
かくさほきなく人わろき御はかほまをうはまん
おふ人はいかゝなんや仏のしきもはこりなきをたう
みちひ等よく志たまふなんかゝ法はかれまゐせ
なけくよ我おかし上などのおはそし時のまろよ

実ヘニ ミヨシ野ノ山ヲナダニ宿モガナ サウキヲアクル家ニセン

侍従モ大ニノシイト嫁シテ心ノ外ニ出ニテトゝ

なつひ竹へ法たる給をさられ此いとおしまうすと
いとおしこかましけな思てなをおもかしたち給へ
世乃うきことおもみえぬ山ぢをあらいうれぬなまゐる
中などハむつましき物とおもかし座るらめむひさ
小僧小人わろきまいよもしておしきこえしなど
いかにもちとくい亀はむ巻よを修したる女りう
さもおひさ給もなんさけき事もあはまし共に
力といふおもかしてすくみてたる法んなるんゆる
されときつふ座く侍従の大夫此おもひぶつひとかさ
らひほおてとむつくもあつざわるれんらわかよ
いそふちてやん申わせてんかいとんくるしきをとて

うのうし甚ゝ雨まぢふ銭のくうきをおまでひさ
しうなわ給わる人よたのみをうけ給法ん乃因小
さわともおわへてもおがしいはるつめでほらし
やい義小ゝ給ふかのお勢をさ給しに銭あはくて
うく高ゝまたるかうゝは道風のほてまても銭おく
いうしき有様をきて法巻給はうふらびとふゝひ
いぞ給てん地とし給おかしけまた大かさ乃法家
好もあわしよわかよあきましけまかゝまのん
すそうのなき御てうとせふどとわうしなりき給
わざとんぼよくおふしさ雨よそのんしすくし給銭
久わ給ふおりぢおいとぐ志つんさるいたゝ山人此

一限キ[illegible]月修 果報ツタナクテトシ

一文ノ名モノ流ス[illegible]ノ毎ノ一二于
一涙ニクレテノテイ

あまたこ此みひとは松かふかたぬとみえし給ふ
はうなめなどいおほ給ひの人見えまはゆかしきべさ
ゆもあくぼりしくハやさしいとおしう
もれいひけるあさやうあわ冬よなはゆくまり
いとゞうきはうむりもなくかなしけりなかめ
はゞし給ふれとのよは古院の御さうの御八講よ此

御八講 河云此時分ハ明石ノ巻ノ次也 彼巻ニ御八講イソガセ給ト有 身ヲ尽ノ巻ニ神無月ニ御八講ニスヘルトアリ 今ノ詞ハ三年己ニ門時也 又源氏仕大臣ハ明年二月也 此巻ニ禅師君ノ詞ニモ權大納言殿ノ御八講ト云リ是横ノ并ノ義也

中ゆいわてし給ふさとよ挿うなとハなへてのい
めさびけんまゝまなきあひりきみたりときはを
まうを給ふれどのきんしの君も参りたへまゐれ
うへまはまはちよわ給てきつゝ權大納言殿の
御いうり事わて給はるあわいとうしう

（朱）双紙ニ　ホノ見　ホヘ　此字ニテミヘハ行ニトノイ　禅師詞

いまは浄土のかざりをとうばひめしうおも
さ給きりともかきわをあんじ給へる佛菩薩の
蓮花の台小さう觀し給ふめまいはれ此りわ
ふかき世よなどてむまれ給ひけんかさいひて座りて
いくら給ひぬしとすくなるよ此人めくぬ佛ありひ
かそうひなきよ此御有様をきゝえ参こえあかせたま
りもとさそもうはりつるなきかのあわはまを念ふ
おほつかなくてきくし給ハさいそうの佛菩薩やと
はうおほゆけよ給ひあめわかゝやうく思ひあわ
給よ大衆の御方かうまきゝわまゐぬハさしもは
ひぬをあうひふそむれ心ちて参るへ参院さうらぐ

五濁 劫濁 見濁 煩悩濁 衆生濁 命濁 佛教ハ五濁ノ一切衆生ヲ済渡アル義也

一本不禅師ノ御仏菩薩ノ変化ト云ニアノ川ニテカヤウニ思ヒカケ給ト云一 又仏菩薩モ此物思スクヒタメニハスト云々

（朱）生佛ニ　ホウテトシム　源氏ハ今ハ浮ノ世ニ　ホン　源ニステラレテ今ノカギリト　シ　スクイナカヘ

などてうしもよ車なりのみにておもちきてまよ
かうりよ物思ひはかげなはさ後してゆくわもあく
りしまきそのせは何侍はすわ人わ猿くさひしさう
恋もかし左右のともえふかす絡がひさうまよけまば
なのこどもたすきかけてどかくわきさはぐいつまり
このさびしきやどもおもふしばわきたる絡何なぶ
天津のかへちやたどはもぼうふうれめんおもて乃かう
しは老ふおふまにすきたまぜいかいしたあしと
あかりしまどあさましうけげたる来すうし出て
侍侍いできたわかふちなどおと絡へりくわとし
もお絡いさうつ舟えたまおひなをあきまけまよし

あはさましてかうじきなくせとわうんばべくる逢
いそたちなんうと思なかうんゞはしふ滞わわ
さ後みをてまわがうさき絃侍侍れむりんかなん楽わ
きたるご絡うくねがり滴てれあはのうううあはら
はまふもりさらを振りまこのひとをふするゆるさを
折へとてなんなどうあれなれげなるさ後ふはとそ
うちもなくべ来うりはまどゆくみちよんを座わ
ていとんちよ老なわ故老おはきしとおんをのきなば
おもてふきなわとおがりすてさわしぼかとく
しきまうよなわうめにしまど舞よ絡もなま
うハやむごとなきさ後よおがりわ大将殿なご

おはしましかよふ比すくせのほど思ひうけなく
思ひ給へらましかばなんむげにひさきさんもうく
するこゝろおかくそきこゝろ侍ける浅茅乃のくさぐさ
めもあかりわろれがほなるぬ方ハ中々心やはらかく侍る
もれあかりわをよびなく見奉りし比御様のいと
あはれなく心ぐるしう侍るのよ給ハそのほどのうちそ
たるおわりもののどうふくあれりしくあん侍るをかく
まるうちまかりわあんと侍りけれバうち給めさく思ひ
わおかえ給などあやうくもれんとけてもいつへ給りしバ
あやうれしき事なまど世によぬうまふそあるよ
すいかうながらあらうくちもう物めかしなん思ひ侍ける

のみかくまんバ世をまうなんおかがさふ亀げまじかる
いく所方を捨てうくむしくばさき侍るすふなくひい
侍るどもやわらん大将殿のはくわえがさ給りんなり
うちハひがうんなまけうそおやも成りんへらめどか
なのりしうハ侍まどさいまは兵部卿の宮北侍
むむあまわかうふきゆ給をけ給ふともふうわくわ
むしまわほふくしきほんまそ子浅ざわなり
かよひ給ふる所々見あおぼしいれまりたくわ
ましてうち捨るゝなきほどまよそ座ぶりうよすぐし
故八宮人をえつ給きよく我をたのみ給へ所おわ
さまと給やうし給ふ事いとうさくなんはるべき身など

いひしらするを、けにとおほすもいとゝかなしくて
つく〱となき給ふ。されどうごくべうもあらねば
よろづにいひわづらひくらして、さらば侍従を
だにと日乃暮るゝまゝにいそげば、侍従あはたゝ
しくてなく〱、さらばまづけふはかうせめ給ふ
をくりばかりにまうで侍らん。この聞えたまふもこと
わりなり。またおぼしわづらふもさる事に侍れば
なかに見給ふるもくるしくなんと思ひてきこゆ。
此人さへうちすてゝむとするをうらめしくもあはれ
にもおぼせど、いひとゞむべきかたもなくていとゞ
ねをのみなきゐまさり給ふ。かた見にそへ
給へき身なれ衣もしほなれたれば、年へぬる
しるし見せ給へき物もなくて、我御ぐしのおちたりける
をとりあつめてかづらにし給へるが、九尺よ
ばかりにていときよらなるを、をかしげなるはこに
いれて、むかしのくのえかうのいとかうばしき
ひとつぼぐしてたまふ。

たゆまじきすぢをたのみし玉かづら思ひの
ほかにかけはなれぬる　こまゝのゝたまひおきし事も
ありしかば、かひなき身なりとも見はてゝむとこそ
思ひつれ。うちすてらるゝもことわりなれど、誰に見
ゆづりてかとうらめしうなんとて、いみじうない給

古ハ衣モ九尺計髪モ
共ニ長トゝ

シノエ香　両義
薫物ノ名也又
薫衣香　衣ニシホ
ハスルト

タヨテモヤニシハ執ヲ内ノ下ニ手向神ハ祖神也旅立ノ時ナレバ玄ケノ神トス カケテチカハ ハ二八末ノカケハ土ヌル トヨミ侍ラ神カケテ チカハントス

これ人も物も寄こそやらばまし此道云ハさうかも
やうさをほとしこ候の志のびやくまよれうさな
すぐし侍るよりくおぼえぬ身ちよりさなりまて
りぬうふまうわおくかぬ事とそ、
玉あづらたえてもやまじゆくみちのたむけれ
神もうけてちかりんいのちこそまわ侍るよなど
いふりいはくくう奈里ぬとつぶやかれてんも
うるすそひかれいづまかへわみのくなんきこえれ
きる華志候もひはしとゆるさ奈まざわ侍る人丸
かくワのきめる事哉いひしんがうおがすによふ
も絶ぬら候まじきおい人さへいそやとりわず

雲ノ井ルコシノシラ山 左ニケリ多ノ年ノ 行ワモリワヽ 伊勢物語ニモ甲斐ノ 白山ヲ思ヤラルヽトアリ

いまでかたちとまわ名残りんわきらもえじうきし
きはましけ道どかのがおよほ経かたまわとも思
いそうとまなまじう思へるを人わろくきておほぼ
東月そうわりなるはゆきおらまぢ絶かそゆる
かは我ゆかふまもわ候を和日夕日をふきくよもぎ
むくゝ乃陰よふうはもわてうしの白山思ひ遣る
窓ゝ雲のうちよ出入しも人ふまあくてはまくと
なかめ候おの家義す我ゆえなくふぬな義かんわる
ひ兄風きさりし侍る人さへなくてそ候もちわがま
しまかへす乃うちもうさりさびしく絶うかなしく
おぼはちかふみれ盛かはめはましきおいかとぞ物さは

すゞしき浦あかしよみてそいとゞ広んごとなくおぼ
は達ぬ事ゝみへけざともえなとつま道ぬりともまして
その人ハ世をやおはほらんとだうわおかりいはゞ
おわもわれとたつね竹ふべき幾ほんさしもいりうで
おりふしよかゞりけるまぬ卯月小花ち雲と
思ひいでゝ出して志のびてたい乃うんよはいと城
やまでゞいで結日ゝ旅ふわはる名おほめほらしうく
きそれしおなどよ月さし出さうし乃御
おわおなぼし出らまでえんなほなどのゆふはく
夜よみち紅よ旅ぼれうおりし出ておはすゝふ
しるもなくほ達たる都乃こたちちはくもわ乃やう

人モナキ宿ニニホヘル
藤花内ニノミコソ
ナビクベラナリ

なほなほ旅ね中宿なる松乃藤乃はな咲かゝりて
月うけになびくさ風よつねてさきりなふが
なほりしくうらえのとなさなかにさあわうち花よは
うちわておりしけれは出旅く旅り柳も
いふうきゞふわてつ解ひちもさりしまゞみだわす
さわらしんちするこたちおとおかゞれハなを所
なわのわいと云めそ車とゝめさきを旅衙の旅先ハ
からは源のひはわきさまをくれおかさふくひかわ
めしよをてこゝいひたちの宮うりし奈きの侍と
幾ゆこゝりおわしひとハまゞやながむらん
とふつぬべき乎わざと猶きんもとゝ旅きしかゝは

花ナルヘノ道ナレハ大松ニ藤咲テ名ヲ梢ニアハリタルト云ヘ折モ卯月ノ面白キ孤

終日ニフル春雨ヤ古ヲコフル秋ノ雲トナル覧 田云末ノ年ハ子失ヘ サクトシ内年ハキハメテ面白気ナル時ノ盛ヨリ出来ヌルヤト見タリト：：

はやてよりわてせうそこせうよくたつまゐわさを
みむよ人たかくしてはなこなうんと此君こそ此は
いとくおりぬまうなこ給すてはくくわうおり
老宰よひ冷泉乃姿小宮高のえし給ひけまはさめて
いと名残おしくおかしてもわぬまゝなふひさし乃
りはかりさ哉しのこときをそておくりしこ乃おさまし
ひめはくくはすきなとしはゝまぬなるさよは給て
なき人をこひたまひしのひまなきにあまたる
折比老僧くさんてうふも心くるしきやとまなんあり
ゆゆこまいらはいりてめくるくく人乃書ほるさや
あるとえるまいさてり人老もきはされはあまゆき

老女ハ侍従ガヲバノ ソネトネ人ヽ

きのみちよゆんいふまと人はこ老もなき物なと思て
かくわ案ふ程に月のあかくさし出るよみまほう
しかさぬりのあけてすゝまうしく気色なりけは
うすみは老たるんちおもおしくさへおほゆまゝおこる
まわてこいはくまはいと物おわするこ儘すてまは
老まふ哉をはきまたてゝれいたまうなま人たと
とふなのわして侍従の君ときこえし人りるめ
めん給ふんといふうまいかうまなん哉老給さまれと
おかしわくましたを女みん侍といふあらいとうまひ
ひさされとききてしれい人ときてし里うちうち
小はたおもひもよらすうわきぬひろさなるわとこ乃

花云 新楽府古塚狐云 大尾ヲ曳作長紅ノ裳トハ、狐女ニ変ズル時ハシノガ尾ヲ紅ノモニナセリ男ニナラバ尾ヲカリキヌノ裾ニゑズヘシト云々

しのびやうにもてなしてなこゑやうにあはればみなりけれども
なまふるめかしきつねなどの変化よやと
おぼゆまでちかうすわてゐしうちなんうけたま
はりまかしきかりつるぬはおはさうなれば露のむすぼれ
さきをなべて義はんさしもたえずなんおりしまいめに
うしこまひもゆきは義ずそりとまらきをなへる哉
いかずききこえさせんうし給やすくなといふ屋だ女子
う絶わりひそりいかせ給はおわはまなりば事る
淺茅かりしとうぼろひ姉あぞいたなんやたまし
もりわて我こえはをなへうしとしへ宮人花
んかもたくひのりしかくのこめぼりのなる哉

まういみなわほぐし侍まど度ゝも侍しいで
とはせがうわもまゐ侍べ義がんばりし人あはれく
まゐぼのくゆゑさきんとて来わぬなぶらいとひさし
うわ侍るいのふずむりしの給もえこぬよもき乃
しばよりなどの給屋だとりくなんたどりまわて
侍侍る侍続がなぶ此か猶也らいひ侍しおい人なん
りいりぬこゝゑふそ侍わ侍ると有様きゝ遊びしう
思よあらゆふしげ義なりよなよんちしてほくし
給らんとまてとはざわをふちと我は心ハ情なさも
おかしてはれいとせべ義かゝふしのびはわきも
かさのゆふべきなあらふはいそでなりでえたちより

かりし無首さ海なりしがなまさあらハあらめと猶し
もうさに人さまよりなんとは此旅のなぐさめのふと
いわ旅りん事おはしましつおがさあゆく御座
はせうちこれいとやすき海なりけれどあんたまのひし
おどろくちをそさうもまざかりしずハ御法のひの
まちわづらひんもいとおしうおぼしとゞめ給
旅宿もさうさまえりをさせを給ましおよよきの露を
さりなん待露はらしりてちきてなんいらせおはし
べき義とゝ雨ませば
旅まてもわまどうかゝりあみちもなくふりぬ
ちまきのかとのあゝ路をとひとわゝもちてなる殊なわ

古今テ歌女二十 ミサフラヒ御笠ト申セ 宮城野ノ木ノ下露ハ 雨ニマサレリ 此ハ花トハカハリタレド 心ハ同ジ露ノ フカキヲ云ンタメ也

旅人はさきれ此露をはむちしてひはしいまさ
たまふほまかしきもなを旅乃あくれめきてうちそし
けにみりきそふゝぬかな三笠つ露ハ雨よまさりわ
てときゝ露はさし御笠乃すゝはいつそおちぬ
めわせかしかなはるのなみなわし中門など
まいてうるもなくあわていわたまふりつきても
いかむとくあるをたちましつる人なきが心唐に
うわの御のめ君ハさわとりとまちもし旅人御心も
まるくされしたれどいとえづらしきはおわさまを
まて樹西をんをいと候ふしうおがしうわ大食の
小の方ちまわをきし法うともいかもこ露ゆかまご御ほ

庭草無萱今雨露 色ニ光馬ニノリテ

花云 ミワノ山ニルシノ
杉ハウセズトタカハ人
ノ我ヲ尋ヌニ 我宿ノ松ハシルシモナカリケリ杉村ナラバ尋キナニシ
今千宗杉ナラバイカニ可尋便ニスヲ杉ナラヌ木ニ十トモ折ルガダクヲ
尋ネ宗曲ノ文ニヘルヒ
トヽ

されしゆうわよやいまだゆかざるまくらを旅人との
かうのはなかをりはよりまたわかるゝいとなほし
きりたちこふ城をわけまだはりのはきえんりきうへ
「行そのみちにまよふたるみちきりひまよすきておはいりわ
行て年法の庵さて心もなさるはかりしずかん
思庵わきこえはやふとさしおしおとゝりい行りぬやう
めしさふらいましてゝ路みきこえはゝのおすぎおもひぬ
こたちのきるさすえゆめでなんまけきこえよきる
とそうさひゝ城すしうお庵わ妙へまとば何乃いと
はくまし?まとんめもいゝへ中さ行りもかくゆる
わきへ皆へ底がおきうくぬりおりひやとこして

イトヾユンノニサリニニ十ヒ
忘レジトムシニタガフ
コトノワラサヨ

ヒキウヘシ人ハムベコソ
老ニテケレ松ノ木高ク
成ニケル哉
源ノウヘ路ニアラ子氏

なのうゑ葉のこし以て行く底かしこ草がくれたり
はぐし行くる年月乃はまれもまなりなしはゞ又
かりぬ心なるひとり人民法ゐのうちもたどわ
こゝろざなゞりわきへはつふ露けさなど袂ゆゝぐ
わがれはしはのまこふりさなべてのよふわがし
ゆふはもんいふまわほのはんまゆあいざつむなん
いのりふたがふはこもわふべきなどほしゝわが
さまぬうもなさきしくきふう袂こえなし行す
どもしあめわたち心まわ行りんも雨乃はまよわ
りとめまのば雪は首積なきばつまくしうの路
すぐしていそ行なんとはえ義う庵しなう行く

前ノ杉ナラスシルシト云詞ヲウケテ松ニ友ノカヽリヌルト云ニ付テ友限トヨメリ十三ノ折ヨリアフギトモシメヽ松ニホツムノ今近侍ヘルトヲウケテ杉ヲミニ住吉ノ明神三ワノ神ヘ通ヒ給トヽ住吉ノキミモセザラム物数ニテタノシヤ人ト申イトハレム男神女神ヘカヨヒ給トヽ

思キヤヒナノワカレニオトロヘテアマノ繩タキイサリセンドハ　篁ホナノ時

松のこずゑはよろづよにとし月比程も何事に荒の（原本ニ虫）初秋十年ニ成

あらうなる浦方のわたりなもおぼしはてけるを

ぬちかみのうちとけくるしく侍るはまゐらう

ましとのまうしなずらひまかりふるまでちかよらば侍るもわ

ぬらんうしかやこにかたちわかちとのおはゆるわ

かゝるもはらまなくあまれなんとのどうぞなんのかなの

わのまにおと侍へし世乃物の行もやさしはくれ

べきまつとし通路ぼらむ事務のくるしからさ

などもまとにうけまへ侍りんとうしなくおぼ

ゆるものぼれはおやしうなん侍とやさしなまへど

としたへてまはまるしなきわのやとを花乃

昔物語ニダウコボチナル　未ニ此又恋し　定家ノ本ニハ塔トアリ或ハ堂トヨメル本アリ奥入ニハ顔叔子カ古事ヲ云リ塔ノ中ニ井テカベヲコボチテ終夜トモシ堂コボシタル女トモ　顔叔子ト云女男ノ他行ノホド男ノワタガヒラシハジトテアカシテ居タルトヽ　河海ニハ丁ト釈セリ　丁ト云本ノトキハ桂中納言ノ物語ト云モノアリ是モ源氏以往ノ物ト見タリ彼物語ニ云貧家ノ女号ヲ小大輔ニ丁ノカタビラキスニスヒテ着スル事アリモシ此ニカ事コボツトハヤブル事ヘヒフキヤウ心アルニナリ実ハ女ノ事ト云ナルヘシ

たよりにはいかゞぬりくりなと思ひやりにまぎらはしうき

たまへるけりひもなでのうも世うしよりは称び

なさわ給へなまやともながさなれいわかざよなわて

もし此ほまどの御義なるよわさりなべきわどの

ごほやもなく折のほまものちわなけまばいらとなる

なのみさしいわたまいわおくみゆる小消り

ありとぬけものさなふとしのふ草まやほ達

さふう八此にふめよわいにやひのりみゆ在着

物語ふうもがちさる人もわまおなもわは

すやふわおるあさうなすとしゆわりまなもなま達

なわひさふなよ物ほくしふなけりひのほまざうま

あそ屋のなるもんにかゝづらはれてうちはへて
まつはれしたひ心をとしはてはまつくの
物思ひによりまさりくさくて人にもそはるかとはかなしと
思ひまさらんといとおしくおぼしけれ花ちる里の
あざ屋すみにもまめしうなどいひたるや幾程わり無所

花ナル里モサセルキ姿ナレ氏末ヨリノメウシタル花ナルノ所ハ能見タル上也抄ニアリイカヾヤヤニリニヤむ花ナル里ヘ行キタニヘル所ハ前ニ見エホレ氏末ヘヨリ殊ヘハ花ナルヨリノ外ヘ殊ニハ花ナルノ姿イテイ花ヤカ殊ニモナキ其目ウシミテ末ノホノトカモカノメタル可成

すて御しめうほしことなくりぬたりとが御用う
かくれたる山わさかきいなどの雑情いはきによ
ことは生きて人のすまひさほ物あこにおかうかをさほ
べきかぎわ待ちくりへ殿中にさぶの宮にはさつま
やうよおりしまわてむほま人くよおかを事
物ひしもべどもなどはのはしてよもぎうちきを

めぐりの先がけしきにゆかずなどいふ物うかれうき
先法くはなをも妙うりそずまいそて御へあとさてはべる
人にも憚りても我はた先めんなくなけれどもわ
数事はあしほと文いとこ夜やうなかなかあちて二条院
いとうちのまき所様はくしをあをうこたりかんかう
すまふべき義よかしおぼわりたべなどめとめさうらふを
妙へなど人のうへまでおぼし宮わはくとうかひ
やすき妙へいがのもあやしきよせきのおとまは嵯峨
我なる義までも女くるもうちをおほそなんうなるよ
むきそよからひ哉えんのあげのはすさひよりも
まゐなへたるよれつまの人なまめとくめ思ひたそ

たまはりむとすかにはうしこまつハとおほむはうしもちもなり
とまふかしわ御わたりたわ城たつきよわ程ともと人乃
きわたるよかくひまなたうへなかうもなのめなり
ふまはつぬはあわさまをも此めしいそ程ハいつ
なかなはれんかり有うんこれも前乃ちまわなあさ
しいてハおほかたとはなはれもてさまくなり
手をひちかきかしこうへしも乃人ハかわるべく
まいらむかしこかるひいはか人もあわ心ちへなど
りらむもれいふさまでよくおはしますはかなき事よ
ん座はくさかひてことなかなきなき座ずなど
座うの数よき人いなかりけりしたかきんちするも

あてうちつき此んえしよ来わうへかふ君ハいかしへ
かもまさうわたわれいきをひれ程かて物の思ひ座わ
もましてうひ程かけまほしき座かわおもしさきそ
たるかくかひいそく寒乃うち座うく人めでたき木
草乃葉もたゞすこしうち寒よみえなされしを
座わたりかけりうひ前栽のもとだちも涼しうもてなし
かどしてきつとなく覚えなきしもげいきのことに
はかなう峨ほうまほし浅すないかくはんとどめて
わざさるをすかめわとみとりて清涼殿まほりをと
はくはいせうしはううまはふやさとせむわは
かうるさうりかりぬ程て東の院ゆしいふかよなんはハ

わたくしまで参る対面し候てなどはいとうく
けれどもちつきまめのほどにて大すもわかり候おい
さしのぎ義などし候ほどいとはなはだしくりぶ
もてなしきこえ候りしこの大事の如此方のなげわて
おどろき思ひけるまゝ侍従がうまし事物のいましく
りまわ義こえざわりも御さう殊にさうにあはぐしう
おもへ候姫などさいますしとりまどかつわらせます
かりそれぬいとうしらいうう御けく物うけまだ
いましたもほいてあらむおわりおり出でなん
義へ両べきとぞ。

廿巻旧廿七ノ時下リテ五年メ九ヒ廿二旧ノ廿二ノ時上ル之

并一

関屋 十六冊ゝ澪標ノ横ノ並二ゝ　花鳥云以詞為巻名竪ノ并也源氏廿八ノ十ナカラ澪標ノ巻ハ八月ノ一ニ
トヾニル此巻ハ九月石山詣ノ一ヲ暦リ故ニ竪ノ并ト云ゝト云ゝ
細流ニ云巻ノ名以詞為是ゝ大坂ノ関ヤイカナルト有ヤ文字ハ助字ゝ不可巻名関屋ヨリサウトクヅレ
出タルトヨリ名付侍リ源氏廿八ノ九月迄ノ一ゝ花ニ竪ノ并トアレ共横ゝト云ゝ
已抄云相坂ノ関屋イカナルニテハナシセキヤハテニハ可成　関屋ヨリトアル门ニヤ付巻ヨコノ并也源氏廿八
九月ノ一カ蓬生ハ卯月ノ比可成此巻ハ空蝉ノ行末迄ノ一ヲ并ル故横ノ并ト云ゝト云ゝ
伊予介ーー源氏廿三ノ年ゝ付巻ハ廿八ノ年ゝヒタチノ国主ハ四年ノ定リゝ是ハ六年中年五年ゝニテノ上洛スルゝ能国主故ゝ
帚木　ハゝキゞ心モシラデト云ヨリ空セミノ一ヲ母キバト云リ
ツクバねーー古今 カヒカ子ヲ子コシ山コシ吹風ヲ人ニモカモヤコトヅテヤラム 常陸国ナル故ニ古今ノカヒカ子ヲ云ゝクバ子トゝ
ヨミニカヘタルゝ東ノ哥ゝ　ウキタルハ遠キ心ゝ
石山聖武ノ御願朗弁開山大佛建立ノ時依無砂金昼夜大息ノ夢中ニ有人而奏云水邉建立伽藍祈請
セバト云ゝ
歌三首

伊予乃介といひしはこ院かくれさせ給て又の
としひたちになりてくだりしかはかのはゝきゝも
いざなはれにけりすまの御たびゐもはるかに
きゝて人しれず思ひやりきこえぬにしもあらざりし
かどつたへきこゆべきよすがだになくてつくばね乃
山をふきこす風もうきたる心ちしていさゝかの
つたへだになくて年月かさなりにけりかぎれる
こともなかりし御たびゐなれど京にかへり
すみ給て又の年の秋ぞひたちはのぼりける
関いる日しもこの殿石山に御願はたしにまうで
給けり京よりかの紀伊守などいひし子ども

打出ノ浜ハ大津ニ関尾ニテ行今松ニ[illegible]まし
六帖 アハタ山コエテコユト思ヘド相坂ハ[illegible]

むかへに来る人々この殿かくまうで給ふべし
つげければみちのほどさはがしからんものぞ
とてまだあかつきよりいそぎけるを女車おほく
所せうゆるぎくるに日たけぬうちいでのはまくる
ほどに殿はあはた山こえ給ぬとて御前の人々
みちもさりあへずきこみぬれば関山にみなおりゐて
こゝかしこの杉のしたに車どもかきおろし
木がくれにゐかしこまりてすぐし奉る車
などかたへはおくらかしさきにたてなどしたれど
なほるいひろく見ゆ車十ばかりぞ袖くちものゝいろ
あひなどももり出て見えたるゐなかびずよしありて

京ヨリ空蝉方ノ車ニ成
牛ヲハナシタル車ヲカキヨロシトナリ
車ヨリ出シ袖

巴抄云狩襖（カリアヲ）トテ表ヲ布裏ヲ絹ニシテ狩衣代ニ見エタルヽ今ノ武士ノスワウノ上下ニハ必裏アリ襖ニ二アリ公家ニテハ才装束ト名目ニ云ヘリ才字未勘ト脛雪ニ作也狩襖ハ又ヒモノシモノクヽリ染モ織物ヲモ用ルヽ

斎宮の御くだりなにぞやうのをりの物みくるま
おぼし出らる殿もかく世にさかえ出給めづらし
さにかずもなき御前どもみなめとゞめたり九月
つごもりなれば紅葉のいろいろこきまぜ霜がれの草
むらむらをかしうみえわたるに関屋よりさと
はづれ出たる旅すがたどもの色々のあをの
つきづきしきぬひ物くゝりぞめのさまもさるかたに
をかしうみゆ御車はすだれおろし給てかの昔のこ君
いまは右衛門のすけなるをめしよせてけふの御
関むかへはえおもひすて給はじなどのたまふ御心の
うちいとあはれにおぼし出る事おほかれど

カモノ祭ナドモタセ
空ノ方ヨリ源ノ氏代ヘ也
源氏代ノ空蝉ノ車ニ
ヘカクレノハドレ
此時ハ源ニ越車ノ例
国主ナドハ露顕トテヤノイトシタル冠ナドモ取ノケテ見ユコノ能国ヲ治タル仁ヨト見ルヤウニスルヽ冠ノ上サヘスダレハ云ニ不及ヽ
タビ人ヲ云
天朝ノ例ニ関ヲ限ル

関越テアハズノ杜ノ
アハズモ清水ニミエ
氷ヲワスルナ

おかそうにてかひなし女も人しれずむかしのこと
わすれねばとりかへしてものあはれなり
ゆくとくとせきとめがたきなみだをやたえぬ
しみづと人はみるらんえしりたまはじかしと思ふに
いとかひなし石山より出たまふ御むかへに
右衛門のすけまいれりひとひまかりすぎしかしこまり
などまうしむかしわらはにていとむつましう
らうたきものにしたまひしかばかうぶりなどえしまで
この御とくにかくれたりしをおぼえぬ世の
さはぎありしころものゝきこえにはばかりて
ひたちにくだりしをすこし御心おきて

當書　罪疑惟軽ス
功疑惟重ス

年ごろはおぼしけれど色にもいだしたまはず
むかしのやうにこそあらねどなほしたしき家人の
うちにはかずへたまひけりきのかみといひしも
いまはかうちのかみにぞなりにけるその
おとうとの右近のぞうとけて御ともにくだりしをぞとり
わきてなし出たまひければそれにぞたれもおもひ
しりてなどてすこしも世にしたがふ心をつかひ
けんなど思ひ出けるすけめしよせて御せうそこ
ありいまはおぼしわすれぬべきことをこゝろながくもおは
するかなと思ひゐたり一日はちぎりしられしを
さはおぼししりけんや

後セニ 貫之
ミホミノス海トキケバヤ夜ドモミルメナクシテ年ノヘヌラム

わくらはにゆきかふみちをたのみしも絶えつゝひ
なし逢坂もなきぬうき関もりのさもうく逢ましく
めぐ海しうるさしうれとあはとし流れとだえと
うぬしく浪よはきどんか小かり清とてなくたゞこの
んちすふなるひよなんすきくしういとぞ小く
まれむやとそ絶へきなばうくさしき無くてもそいそ
きそな残者こし妙へ昔まはすうしおかしのくまず
わらん思ひ絶ふ事よれなしやうな流清ちる残乃
なほりしさなん別しでこかごきすさひ事ぶちう
なむ文ちとくおもんぞえうすぐように我きこえうん
千年母ゆきいまけやく妙へらんよ清見ゆるされぬ

べしなどいひこえましていとりぼりしうよ流川の
事うぬくしきんちもまどめはらしきすやえ
思ひはさざわらん
あふさかの此関やいかある名義ふみさせこさ歌の
なりをわくらん夢の逢うりなんときこえさわ
わすれもはつさも逢ぬよしぞおかしをかき
うな人なきばおわくいな絵のたまひうごかし
くわあふ海をよさのひちれかえおいの清あわ
よやふやましまして猶ちる残かうわられだ
ふらもよたぐらの暮れ清ろをのこいひおきて
よ流川のうたぐらの清ちる絵りの見ましをかく

兼帥
サダメニノコス命ヲ
ユテシ我老テ先ダヽ
ク井ナカルベキ

あはれなる世にありいでゝはかなきまゝとのこゝはくれ
いひとゞめおきてこし程のすくさてこれ人なり
さんなくまでいのなるちぎりをふさまかふべき
かりねんとおもひかけぬたまふをみるなり原乃
おぼわたあはぬ物からねどもわしみえともせば義うちなし
いのでゝ此人の清たあまりのこしをくましぬも
うかりがねどもものにも跡もたゝぬをとこしるめぐり
うかしぶすよいひおもわんどゝみえとくめぬ
物まそうをぬしけしらうさのなまひしものを
などなきゆゑはくれにゆかうべきあまはゝぬす
おかりわとあほくちかも世のことくわなれは

大かたの我がひとつの
うきからにて世をも
なげきつるかな

我ひとはれうきすそこはげきあうしくるにるぬ
これうちれのみやむしよわ儀むろ後はわて
まこしなさけがわ老ぶあそれりの後全きしを
物なしびともおかしうとまでの後きをよむたい
物うちよわていかでおきまし心乃みしなれう
すくをあふ我りてかくいきとまわてそくい
めぼうしき事どもを来しうふふの御かし人志まで
おりひちわて人りさなんとも志うきそぞはまり
なかよくわあふ人にいふうひなしと思ひなけく
うみもいとはうてさのまをいとひたまふかとあり
のこさ乃よりひはおほく物一路ふらんいかでゐ

サカシラ 進退 日本紀
古今 サカシラニ
夏ハ人ニマサンハノ
サヤシ欲シワカ
ヒトリヌル
六帖 秋ノ野ニ
行テミルヘキ花ノ色ヲ
タガサカシラニ折テキツラム

はぐし給べきなどぞ何はなけれはかしくやあらず
侍るめり